



象牙39トンを日本が落札!

象牙一時輸入決着・「量より実」、来年1月にも

ついに象牙が入ってくる。
99年以来、実に9年ぶりとなる恵みの雨だ。

10月28日から11月6日にかけて、ナミビア、ボツワナ、ジンバブエ、南アフリカの4ヶ国で行われた象牙入札には、象牙印材メーカーなどが所属する日本象牙美術工芸組合連合会（会長・櫻井実氏）のメンバー20社23名が参加。中国と一騎打ちの競売で、象牙39トンを落札した。この象牙は早ければ来年1月に日本に入ってくる。

この明るいニュースに「象牙印材が少しは安くなる」と期待している印章店も多いだろうが、現実には厳しい。輸入量39トンは、99年に一時輸入された50トンを下回る量。しかも、今回取り引きしたナミビア、ボツワ

ナ、ジンバブエ、南アフリカの4ヶ国は、今後9年間、象牙を取引しないことが決定している。依然として、象牙を取り巻く状況は変わっていない。

しかし、今回の取引は02年に正式決定してから二転三転し、一時は200トン以上の象牙が入ってくる可能性もあると言われていた。それが最終的には39トン。なぜこの結果になったのか、順を追って見ていこう。

101トンのめぐって

中国と競売に

発端は02年、チリの首都サンティアゴで開かれたCITES締約国会議。ここで、南アフリカ共和国、ボツワナ、ナミビアの3カ国が、象の生息数が回復

してきたことを理由に、自然死や政府による合法的な取引によって得られた象牙の一時取引再開を求め、承認された。この時認められた象牙は計60トン。ところが04年のCITES常設委員会では不法屠殺や密輸、違法販売を監視、調査する専門調査機関「MIKE」の報告遅延と、日本の管理体制が不十分だと判断され、輸出延期の憂き目を見た。そこで、日本は全日本印章

業組合連合会（中島正一会長）を中心に管理の徹底を図り高評価を受けた。そして06年、再びCITES常設委員会が60トンの象牙輸出を討議。しかし、またも「MIKE」の報告遅延を理由に輸出が延期された。そして07年6月、オランダのハーグで行われたCITESの

常設委員会で、先送りにされていた象牙60トンの輸出が決定した。さらに、輸出入である南アフリカ共和国、ボツワナ、ナミビアの3カ国が輸出入量の増加を提案。その量は140トン近くあると見られ、元の60トンと合わせれば200トン近くの象牙輸出が期待された。

ところが、このハーグの常設委で中国が象牙取引に手を挙げた。背景には、国内の景気上昇で消費が高まり、象牙美術品に人気が集まったからだ。この時、CITESは「中国の流通監視体制には不備がある」として象牙取引の申請を却下。

しかし、ここからすんなりと話が進まなかった。関係者によると、「輸出側の南アフリカ、ボツワナ、ナミビアなどが中国

も取引先に加えて欲しいと要望を出したからでは」と見る。

前述の通り、中国は景気上昇で象牙美術品の需要が高まっていた。日本は輸入した象牙の多くが印材になるのに対し、中国は美術品で、その方が末端価格が高くなる。つまり、原産国側に「中国が参入した方が高く売れるのでは」という読みがあったのだらう。その当時は、「中国が原産国に対してキ口当たり500〜700ドル出す」という噂も流れた。こうした噂の真偽は別にしても、今年7月のCITES常設委員会でも下された最終決定は、「象牙の総量は108トン、日本と中国に限り競売する」だった。

入札の日程は次の通り。
10月28日 ナミビア・ウイン



象牙組合のメンバー23名は10月25日から11月8日までの15日間、象牙入札のためにアフリカへ。道程で19回も飛行機に乗るハードスケジュールだった。㊦はナミビアが出した象牙を検品する組合員の姿。写真右のように、印材にならない折れた先端部分も多くあった。こうした端材は中国が落札。美術品のパーツに使うと見られている。㊧はナミビアの競売会場の様子。



ドフック 7トン
 10月31日 ポツワナ・カポロ
 ーネ 44トン
 11月3日 ジンバブエ・ハラ
 レ 4トン
 11月6日 南アフリカ・ヨハ
 ネスブルグ 51トン
 (各国から出された象牙の量は
 ネットニュースに基づく。計1
 06トンだが、実際に競売され
 たのは101トン)。
 入札の前日には、参加した象
 牙組合のメンバーがあらかじめ
 象牙を検品。ある程度の量にま
 とめられた象牙の山毎に入札予
 定価格を決めて、翌日は会場で

競売を行う。ちなみに、象牙の
 質は大、中、小が入り交じり、
 国によっては印材に最適な中サ
 イズがほとんどないこともあっ
 たそうだ。

落札は200ドル

印材価格は据置か

今回の入札で懸念されていた
 のが、中国の入札額。噂通りキ
 口当たり500〜700ドル出
 されたのでは、日本の業者に勝
 ち目はない。象牙はただ競り落
 とすだけでなく、そこに原産国
 で課せられる税金10%やその他
 の税金、船賃、保険、国内運送
 費など様々な経費がかかる。元
 値が高すぎると、印材として販
 売するのは不可能になる。

ところが、蓋を開けてみると、
 入札額はキ口当たり平均200
 ドル(約2万円)程度に落ち着
 いた。象牙組合に所属し、実際
 にアフリカで入札に参加した俵
 タカイチの高市雅也社長は、
 「11月11日付の日経新聞ではキ
 口当たり150ドルと報じられ
 ましたが、4ヶ国全ての取引の
 平均はおおよそ200ドル。一
 番高い値は中国が付けた400
 ドルですね。全体的には落ち着
 いた取引だった」。

ご報告

日数	月/日	発生品	数量	スラジエール/備品	数量
1	10月25日(土)	交流機 パレット	TQ-420 1145	スラジエール/備品 備品(高市社長が購入)にて	0
2	10月26日(日)	パレット ヨハネスブルグ ヨハネスブルグ ワイントラック	TQ-702 046 655 SA-074	運送トラック(高市社長が購入)にて ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ ヨハネスブルグにてワイントラックへ 高市社長が購入にてワイントラックへ 高市社長が購入にてワイントラックへ	0
3	10月27日(月)	ワイントラック		高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
4	10月28日(火)	ワイントラック		高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
5	10月29日(水)	ワイントラック ヨハネスブルグ ヨハネスブルグ ワイントラック	SA-1152 020 1050 SA-1185	高市社長が購入にてヨハネスブルグ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ	0
6	10月30日(木)	ワイントラック		高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
7	10月31日(金)	ワイントラック		高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
8	11月1日(土)	ワイントラック ヨハネスブルグ ヨハネスブルグ ワイントラック	SA-1780 020 1050 SA-040	高市社長が購入にてヨハネスブルグ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ	0
9	11月2日(日)	ワイントラック		高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
10	11月3日(月)	ワイントラック ワイントラック	UM-932 1100 1230	高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
11	11月4日(火)	ワイントラック ヨハネスブルグ ヨハネスブルグ	SA-025 720 240 1120	高市社長が購入にてヨハネスブルグ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ ヨハネスブルグにてヨハネスブルグへ	0
12	11月5日(水)	ヨハネスブルグ ヨハネスブルグ	SA-046 1500 1730	高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
13	11月6日(木)	ヨハネスブルグ		高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
14	11月7日(金)	ヨハネスブルグ	TQ-702 1020	高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0
15	11月8日(土)	パレット パレット パレット パレット	TQ-420 600 600 4130	高市社長が購入 象牙製品 (ワイントラック)	0

※高市社長の報告により発生品が変更した場合は、この報告と異なります。

象牙組合の旅スケジュール。象牙の競売は
アフリカ4ヶ国それぞれの地で行われるため、
広大なアフリカ大陸を何度も行き来した。

同じく、象牙組合員で、入社に参加した(株)イケウチの池内隆宏社長も、

「大きな牙、小さな牙、折れた牙などは中国が買って、印材に適した中サイズの牙を日本が買う」という流れ。競り合って価格が急騰することもなかった。

また、日経新聞の記事には総量1011トンのうち、中国が62トン落札し、日本が競り負けたという記事が掲載されたが、これについても、

「中国は美術品用途だから、小さなパーツを組み合わせて作る人が多い。だから多少ヒビが入っていたり、小さな折れた牙でも買う価値があるけど、日本は印材なのでそうはいかない。落札した量は少ないが、中身は充実している」(高市社長)。

しかし、質のいい象牙とは言

え、39トンだけでは在庫を潤すことができない。

落札した39トンを単純に象牙組合のメンバー20社で割ると、1社あたり約2トン。今後9年間、象牙取引がないとしたら、1年間に220キロ程度、月に18キロの象牙しか使えないことになる。まさに雀の涙と言ったところだ。高市社長によると、月に18キロ程度の象牙なら、国内で買い集めたり交換会で充分手に入る量ですね。

池内社長も、「昭和の頃、最盛期では月に1トン半の象牙を印材にしていたこともある。今は需要がそこまで無いにしても、この量では少なすぎる」。もちろん、象牙印材メーカーは今回の取引で得た以外に、在庫の象牙がある。すぐに象牙が無くなってしまふことはない

が、徐々に減っていくことは明白だ。そのことから、価格は現在のまま据え置かれると見られる。

4ヶ国以外からの象牙放出に期待

また、今後の象牙取引についても不透明。高市社長は、「4ヶ国が一時輸出の後、9年間の取引禁止になったことは、他国にも多少なりとも影響するだろう」と見る。池内社長も同様だが、今回の取引については、「量よりも、象牙が入ってきたという事実が重要がある。象牙組合もこれに向けて努力を続けてきましたから」。

小さな希望の光として、「タンザニアあたりが100トンほど象牙を持っているという噂もある。今回取り引きした4ヶ国以外の象牙保有国が輸出に手を挙げてくれることを期待するしかない」(高市社長)。

今回は象牙組合や各象牙メーカーの動きで成果を上げることができたが、決して象牙在庫は多くない。今後は各メーカーが国内の象牙買い取りをより強化するなどの動きが強まってきそうだ。

(終)